



## 「知魚楽」 うおたのしみをとる

人の意表を衝く多くの独創的な議論や寓話を数多く残した荘子は、中国古代(紀元前四世紀頃)の思想家で道教・始祖の一人だ。

「知魚楽」は、『莊子』外篇の「秋水」

い。どこから魚が楽しんでいるとわかるのかな」と反論してきた。

堪らず荘子は、「君は私ではない。どこから私には魚が楽しんでいることがわからないとわかるのかな」とやり返した。

そこで恵子は、「私は君ではな

のかと言ったのは、すでに私には魚が楽しんでいることがわかって

いるということがわかって質問したのだから。私は川のほとりでわかったのだ」と答えたのである。

「どこから」と問いかけた恵子に、荘子は「どこで」にすり替えて答えたのである。

荘子は、親友の恵子を論破するのではなく論点をはぐらかして答えたところに妙があるとは言え、他者の気持ちを理解することの容易さと困難さを一緒くたにした故事ではないだろうか\*。

## 「相槌あいうえお」

荘子が「魚がゆったりと泳いでいる。魚が楽しんでいるのだね」と言ったとき、恵子が機転を利かせて相槌を打ったとしたら、その文脈は大きく変わってくる。とはいえ、無暗矢鱈と打てばよいというものではない。

聞き上手になるための「相槌あいうえお」がある。

「あつ、そうなんだ!」

「いやー、おどろきました!」

「うあつ、ホントですか!」

「えーっ、それはすごい!」

「おー、なるほど!」

このなかから一つ選んで相槌を打っていたとしたら、荘子はムキになって反論することはなかった

だろう。むしろ、嬉しさのあまり同調効果という心理が働きだし、もっと聞いて欲しいと饒舌になっ

たかも知れない。

だが、同調しているからと言って共感しているとは限らない。

恵子は、自らの気持ちや感情に向き合うことなく、荘子の考え方を受け容れただけに過ぎない。

荘子のことだから、恵子も同じ気持ちや味わっているのだと思いつくようなことはしないだろう。

我々は、荘子でも恵子でもない。

同調と共感の違いを理解しないまま、使っていないだろうか。

「話を聞いてくれない」、「話を折る」、「やることなすこと否定してくる」など、口々に不満を漏らす職員がいる。

その一つひとつに反論するの

か、相槌を打つのか。

はたまた、「あなたの言うとお

りだね」とでも答えるのか。

「共感を頼りに文脈を紡ぐ女性の対話は、プロセス指向共感型」であるという\*2。

転期に立つ経営の視座⑦4

## 「人の上見て」

## 我が身を思え」

のなかで彼が親友の恵子と交わした問答に登場する。

荘子と恵子が、川のほとりを散策していたときのこと。

荘子は、「魚がゆったりと泳いでいる。魚が楽しんでいるのだね」と言った。

すると恵子は、「君は魚ではな

い。だから君のことはわからない。

しかし君は魚じゃない。だから君が魚の楽しんでいることがわからないということも、明らかじゃないのかな」と論じてきた。

荘子は、「本題に立ち返ってみよう。君が私に、君はどこから(どこで)魚が楽しんでいるとわかる

### はやかわ・ひろし

経営コンサルタント。「継承と人材創造塾」主宰。『介護ビジョン』編集委員、介護福祉教育マスター、健康経営アドバイザー。著書に『99の言葉の杖』(日本医療企画)、『早川浩士の常在学場』(筒井書房)、『介護人材創造塾』(筒井書房)、『介護保険改正に勝つ! 経営』(年友企画)、『データで徹底分析 介護事業の最新動向と経営展望』(日本医療企画)など。

HP: <http://www.hayakawa-planning.com>

\*1: 蜂屋邦夫著『荘子=超俗の境へ』(講談社刊)

\*2: 2019年7月号本稿参照